

# 春燈

August 2015

8 月号



主宰の句

安立公彦

万太郎忌若き学徒に未来あれ

(祝・福井拓也君)

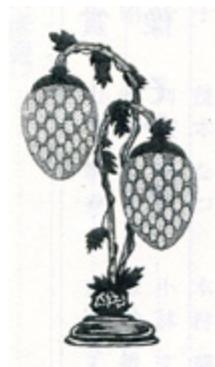
潮入の堰高だかと薄暑かな

若きらに就く夏蝶や旧四高

(金沢二句)

犀星の筆跡親し旅五月

浴衣着て父母なき家郷闇深し



# 久保田万太郎の句

## 連翹やかくれ住むとにあらねども

『流寓抄』昭和三十三年

「嘆かしの詩人」として漂泊の魂を抱き続けた師は、晩年、運命の人とめぐり逢う。それは一輪の花のようなやすらぎを与える女性であった。必ずしも幸と言えない半生の家庭生活をとり返すような、至福の日々であった。ひそやかな幸の息づかいが伝わってくる。

それが束の間の幸であったとしても、師の晩年に添う一筋の光景を見る思いがする。

高橋和女

# 久保田万太郎の句

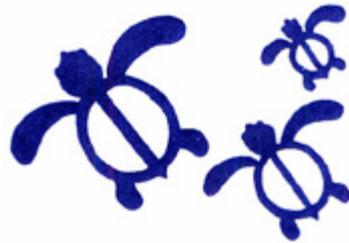
したゝかに水をうちたる夕ざくら

『草の丈』昭和二十七年

道路にたつぷり撒かれた水。桜がそこに薄い影を置く。淡々しい夕桜は清楚で平和だ。「したゝかに」が如何にも万太郎先生らしい。掲句の前書に「渡邊町といふところ」とある。先生は大震災後渡邊町に移られ大正十五年まで住まわれる。「日暮りのころ」の冒頭句の前書に「大正十二年十一月 日暮里渡邊町に住む。親子三人、水入らずにて、はじめてもちたる所帯なり」とある。

佐々木新

# 燈下集



○ 園部 落郷

ああ言へばかういふ妻や糸柳  
山人に知合ひ多し花さびた  
鷹鳩と化して庭木にででぼつぼ  
傘雨忌や畑に恵みの雨いたる  
縄文の鎌出る畑地虫出づ

○ 松橋 利雄

城見ゆる窓の八十八夜かな  
葉桜やひとり歩きの独り言  
袋掛にはかの風に日の翳る  
時の日の鐘の音澄める音楽寺（秩父）  
桜桃忌さめし紅茶をかこちけり

○ 橘 正義

何鳥か力をこめて囀るは  
やつと見たり雨中飛交ふ初燕  
これぞ藤色といふ真つ盛りなり  
薫風裡来てブルックナー開始かな（トレモロ）  
大雷雨そのあと震度3ありけり（五月ある夜）

○ 柴崎 富子

昨日より今日の群青五月富士  
余花散るや百花百様風まかせ  
大地這ふは祈りなるらむ黒揚羽  
木洩日のいよよ艶増す新樹林  
思ひ出すこと限りなし夕焼雲

○ 小林のり人

息抜きに海を見てをり畦塗りす

訪うてゐる植田の中の一軒家

早乙女のみんな上座や青畳

親の子らし水をたくみに盗みけり

月の出の遅きをなげく蛙かな

○ 三上程子

直球で返事のもどる端午かな

清らかな空の上にも空ありて

全身で息してゐたり袋角

衣更へてみても潰しの効かぬ身よ

足跡を残さず蟻の走りけり

○ 井上春子

櫛並木五月の風がふくらます

白靴はりハビリシューズなりしかな

晴るる朝新茶の封を切る日とす

竹落葉小さき流れに乗りにけり

初燕海からの風軽くなり

○ 中野あぐり

青田より雨降りはじめ総の国

十葉の花や箒の反りつよき

セルを着て敦・誠も遠きかな

大き岩たたいて帰る泳ぎの子

芙蓉閉つわれにも同じ刻ながれ

○ 諸戸せつ子

余生濃く生くるが望み日傘さす

裸子の地震に怯えて抱きつかる

友の句集手離すも定め花栲

梅雨に入る血圧計の赤マーク

未練無しと言うてはみても蛍掌に

○ 大嶋洋子

夏隣草花の苗選びあふ

ひとり居や小手毬壺にさざめくよ

朝掘りの筍届けくれしかな

紅薔薇夫の遺愛の香なりけり

恙あり籠りぐせつき五月果つ

# 当月集

安立 公彦選



○ 赤岡 茂子

草稿を書き上げ五月の風美味し

夏つばめ知りつくしたる千住路地

大月や足裏の感度鈍り初む

虞美人草夕日彩り深めけり

放課後の人生ゆるりと夏に入る

○ 吉村 さよ子

うつむきて聞こえぬふりの団扇かな

今に残る小室古道や花うばら

六月の手慣れし辞書のしめりかな

加齢とや膝勞しき栗の花

介護士のためでてるや小紫陽花

○ 齋藤 晴夫

ふかふかと日は天心に鳥の恋

香りくる藤の花房幼かり

牡丹散り歌舞音曲のとだえけり

思ひ出の遠き昭和の緑かな

子等去りし砂の山河に風薫る

○ 佐藤 博重

駒形に醬の匂ふ立夏かな

傘雨忌や「駒形どぜう」の店とほる

あみ清の屋形の旗や大南風

満を持す神輿の前を人力車

路地裏に祭囃子の歯切れよく

○ 上野 進

滴りて山の靈気を湿らせる

山並と家並隔つる新茶畑

蛍火の消ゆるは恋の成就なる

居眠りの夢におどろく水馬

白緋着てマネキンやのつぺらぼう

# 春燈の句

安立 公彦選

噴水の昇りつめては崩れけり

京都 村上 國枝

鯉職幾年納屋に眠りたる

サラブレッド余生を牧場に風薫る  
勝馬の首たたかれて涼しき日

風鈴に川風の来て鳴りやます

背伸ばせと背を撫でらるる今年竹  
初咲きの薔薇惜しげなく剪り呉れし

師に目見え夢の親睦明易し

野蒜摘むや青磁小鉢に白映ゆる  
少女等の髪靡かする初夏の風

萎ゆる指もてさす五十首遠蛙（翁 齋藤延喜）

鳥根 土江 比呂

朝涼の神鈴杜の木の間より

聖五月絆よろこぶ句座なりし（眞充先生）

鱒刺の群の一瞬沖晴るる

夏富士に面影かさねおたりけり（禾打師忌）  
神奈川 山下 健治

托鉢の法衣の埃街薄暑

気品とは斯くなる姿花菖蒲  
雨ごとに彩り深む濃紫陽花

迅雷に醒め遠雷に眠りをり

東京 小林 文良

手古舞のおきやんや神田祭練る

物干して五月晴なる百姓家

駅守る猫の目細し風薫る

京都 安達 正行

薫風や馬上雄偉の楠公像

葉桜や床几に淡き影落とし

囀や不意の絵葉書ローマより

東京 那須 禮子

庭師来て五月の風の通ふ庭

麦の秋ゆるりと去りぬ小浜線  
卯波立つ島に集へり同窓会



# 余言

安立公彦

田水入りたそがれ谷戸をつつみけり 上山 永晃

五月の本部句会で特選に頂いた句の一。その折は、三月の勉強会における、安房鴨川の千枚田に準えて鑑賞したが、この句は場所を特定しない普遍性を持つ。

代掻きが終わり、田水を張った田。明日からの田植を待つばかりだ。歳時記には、田植を神事として、作業をリードする田植歌は、「田の神の加護と恩恵を願う神への賛歌」と記してあるものもある。現在のような機械化された田植では想像することも出来ない景である。しかし代田に始まり早苗田、青田と、苗の成長に併せて呼び方を替える風習には、神事の名残が色濃く感じられる。一村をつつむ「たそがれ」の安らかな情景が印象深い一句である。

父の世にありし戦や夏の日

佐藤 信子

五月二十八日、京都綾部における丹波句会に出席した。同行は、佐藤信子、三上程子、林紀夫の三氏。綾部は遠い。京都から更に山陰線に乗り替えて一時間余りある。そういう地域的に決して便利とは言えない地に、京都、兵庫から多くの方々が参加された。

句会は綾部市中央公民館の二階で、山下朝香さんの手馴れた司会のもとに、着々と進行した。そういう中で、私は掲出の一句に注目した。この「戦」は第二次世界大戦である。「父の世にありし」戦争だが、それは当時を生きる子らの中にも、生々しい傷跡を残しているのだ。

七十年過ぎた今、ひとり夏の夜空に輝く月を眺めて、在りし日の父を偲ぶ作者の姿が浮かんで来る。

大地這ふは祈りなるらむ黒揚羽 柴崎 富子

炎えるような盛夏の一日。強烈な日差しをあびながら、全身黒色の揚羽蝶が、大地を這うかに弱々しく舞う。それは作者の眼には、大地に祈るかのように映った。物音一つしない炎天の下、その黒揚羽の姿にいつか同化する作者。その一瞬、現実には黒揚羽と作者のみの世界となる。こういう純粹な句を見るのは久しぶりのことである。

時の日の鐘の音澄める音楽寺

松橋 利雄

「音楽寺」とは社寺の正式な名称なのか。秩父三十四所の一つのことだが、みやびな名である。翻って考えて見るに、近頃全くと言っていいほど話題に上らないのが「時の日」である。六月十日が「時の記念日」であること認識している人が、今の日本に如何ほど居ることだろうか。後発の「父の日」の方が社会的知名度は高くなっている。

この句、たまたま「音楽寺」の前を過ぎようとして、折から鳴り出した鐘の音を聞いた作者である。その鐘声の余りの澄明さに立ち止まり、その一瞬、今日が「時の日」であると思ひ、暫くその音色に聞き入る作者。日常のなかの些事、しかしその些事にこそ俳句の思ひは息衝くのだ。

セルを着て敦・誠も遠きかな

中野あぐり

昭和六十三年七月八日に安住敦、平成七年三月十日に西山誠のお二人が逝かれた。昨年七月には、安住先生の二十七回忌法要が、目黒祐天寺で催された。西山誠さんの二十三回忌は二年後である。

私たちは、日常のあれこれに追われ、故人の回忌を振り返るいとまをつい失念することが多い。今作者は、更衣のセルを着て、ふと敦、誠両先生のことを鮮明に思い出すのである。その追悼の思ひは、故人への何よりの供養となるだろう。へ人の愛うたがはずセル着たりけり 敦。

大瑠璃や遠見に仰ぐ甲武信岳

鈴木 静恵

「甲武信岳」いい名前だ。『日本百名山』の冒頭に、著者はこう記す。「ゴブシという名前のよき一歯切れのよい、何か颯爽とした山を思わせるような名前…」とし、更に「(この山の)頂上に降った一滴は、千曲川に落ちて信濃川となり日本海に入る…」と書く。

今作者は、二四六〇米の甲武信岳を「遠見に仰」ぎ、改めてこの山の良さを納得しているのだ。この中七に作者の思ひが良く顕れている。「大瑠璃」も適確な季語だ。

作者はこの三月、句集『花ごぶし』を上木された。先に刊行された夫君鈴木鳳来さんの『故山』と対をなす句集。へ山の子の畦跳んでくる午祭。親しみを呼ぶ句集だ。

鮮やかに頬を掠めり燕の子

卯木 堯子

燕の雛が孵るのは五月と七月、それぞれ一番子、二番子と呼ばれる、と歳時記は記す。先日房総風土記の丘に行き、帰りの電車を最寄りの駅で待つ間、親燕が身を翻して間断なく飛び交っていた。子燕への餌やりだった。

その子燕も時宜を得て飛ぶことを覚えたのだ。しかもこの句の燕は里山でなく人の住む町中。町中であれば人も子燕に余計に親しみを感じよう。「鮮やかに頬を掠めり」がその辺りの思ひを一層確かに表現している。

# 木下夕爾没後五十年特集



大正3年10月27日、福山市御幸町に生る。本名優二。広島県立府中中学を経て、昭和7年第一早稲田高等学院(仏文)に入学。家業を継ぐため名古屋薬専に転じ、薬局を経営。詩は中学時代に堀口大学に認められ、昭和14年『田舎の食卓』により文芸汎論詩集賞受賞。昭和24年、詩誌「木靴」創刊主宰。俳句は昭和21年「春燈」創刊とともに参加。昭和36年、広島春燈会を起こし「春雷」を主宰。昭和40年8月、横行結腸癌のために永眠。詩集『生れた家』『昔の歌』『晩夏』など、句集『南風抄』『遠雷』。没後『定本木下夕爾詩集』(昭和57年刊)で読売文学賞を受賞。

# 木下夕爾百句

安立公彦抄出

『遠雷以前』より 6句

野を焼くやわれに幼き日の記憶  
日まはりのゆらりと高き苑生かな  
今日ぎりの休暇となりぬ油蟬  
別れ来しコスモスの柵長かりし  
かまつかに夕映しばしとどまれる  
焚火消えて真如の闇となりにけり

わが声の二月の餅まぎれなく  
水ぐるまひかりやまずよ露の臺  
この丘のつくしをさなききつね雨  
春雨やみなまたたける水たまり  
子のグリム父の高邱春ともし  
家々や菜の花いろの燈をともし  
夕東風のともしゆく燈のひとつつ  
哀憐の日ははろかなり青き踏む  
鐘の音を追ふ鐘の音よ春の昼

『遠雷』より 61句

たまねぎに映るかまど火娶りたれば  
春の燈やわれのともせばかく暗く  
かたく巻く卒業証書遠ひばり  
踏青やきこえて遠き卒業歌  
いつ消えしわが手のたばこ啄木忌  
黒穂抜けばあたりの麦の哀しめり  
郭公や柱と古りし一家族  
かたつむり日月遠くねむりたる  
驟雨くるくちなしの香を踏みにじり  
泉のごとくよき詩をわれに湧かしめよ  
若かりし日の白昼夢桐の花  
遠雷やはづしてひかる耳かざり  
海の音にひまはり黒き瞳をひらく  
少年に帯もどかしや蚊喰鳥  
遠き海夏手套に指されたる

こころふとかよへり風の青すだれ  
樹を変へし蟬のこころにふれにけり  
林中の石みな病める晩夏かな  
ふりいでし雨の水輪よ休暇果つ  
とけてゐるアイスクリーム秋の蟬  
をちの燈のひとつともれる野分かな  
稲妻や夜も語りゐる葦と沼  
地球儀のうしろの夜の秋の闇  
いくさ果つ秋の燈はてもなくともり  
秋の燈のいつものひとつともりたる  
秋草もひとの面輪もうちそよぎ  
海鳴りのはるけき芒折りにけり  
秋風の揺りゐる木の実みな青き  
芒折つてゆびさせば海消えにけり  
繭の中もつめたき秋の夜あらむ

こほろぎやいつもの午後のいつもの椅子  
こほろぎの鳴きつぐごとく綴る詩か  
かくれすふたばこのけむり秋の風  
にせものときまりし壺の夜長かな  
翅青き虫きてまとふ夜学かな  
落し水落ちいそぐ夜となれりけり  
馬追ひの影ひえびえとしたがへり  
今年藁ことしの秋のほひけり  
だしぬけに遮断機下りぬうらがるる  
めつむりて厩をきくともあらず  
短日の貨車押しあひつつ停る  
短日のひとりはつひにふりむかず  
樹には樹の哀しみのありもがり笛  
汽笛の尾ながし片側町の冬  
枯野ゆくわがこころには蒼き沼

ねむるべしかの沼もいまはこほりをらむ  
いつ尽きし町ぞ枯野にふりかへり  
毛糸あめば馬車はもしぼし海に沿ひ  
とぢし眼のうらにも山のねむりけり  
しぐれ忌のしぐるる燈火明うせよ  
ともかくもくはへしたばこふところ手  
寒林に日も吊されてゐたりしよ  
『春雷その他』より 11句  
春の月疲れたる黄をかかげけり  
卒業歌をはりしなみだすぐかわく  
夭折す皿にのこれるパセリ青く  
惜春のいつ失ひし備忘録  
地球儀のあをきひかりの五月来ぬ  
湧きつぎて空閉ざす雲原爆忌

秋燕やまるべば高き草の丈  
石投げて心つながる秋の水  
枝豆や詩酒生涯は我になし  
桐は実に日輪寂びてかかりけり  
逢ふがわかれのさだめの落葉美しき

『遠雷以後』より 22句

初茜してふるさとのやすけさよ  
芽ぐみゐる幹のうしろの港町  
異人墓地菜の花あかりまとひたる  
わがつけし傷に樹脂噴く五月来ぬ  
手をふれてピアノつめたき五月かな  
ふりいでてしろき雨脚苳喰ふ  
明日をたのむこころどくだみ夜を匂ふ  
町川に町の燈しづむ梅雨入かな

書庫にかへす詩書の天金麦の秋  
たべのこすパセリのをき祭かな  
ひかりいでし雨の豎琴祭果つ  
学園の留守さかんなる夏樹かな  
少年に蟬の森かぎりなくあをし  
ひとの手のつめたき記憶夜の秋  
触れて鳴る氷片の音休暇果つ  
ふりむいてまだ海見ゆる展墓かな  
曼珠沙華わが満身に罪の傷  
葬列のかくれ了せぬ稲架襖  
稲架ぶすま夜々あたたかき月あげぬ  
梟や机の下も風棲める  
冬園のベンチを領し詩人たり  
枯れいそぐものに月かくほそりけり